

平成19年度学術創成研究費 中間評価結果

研究課題名	国際的ビジネス紛争の法的解決の実効性を高めるための新たなフレームワークの構築	研究代表者名	河野 正憲
-------	--	--------	-------

該当箇所()に 等の印を付け、意見を記入してください。

1 研究を推進する必要性について

推薦の趣旨に照らし、採択時以降の関連研究分野の学術動向を踏まえた上で引き続き研究を推進する必要性は高いか

- ア() 高い
- イ() やや高い
- ウ() やや低い
- エ() 低い

意見：
新しい試みであり、継続的に推進する必要性が高い。

2 研究の進捗状況について

(1) 当初の研究目的に沿って、着実に研究が進展しているか

- ア() 予定以上に進展している
- イ() 概ね予定どおり進展している
- ウ() やや遅れている
- エ() 遅れている

意見：
日本、ヨーロッパにおけるシンポジウムの開催等、計画通りに進んでいると判断される。

(2) 今後の研究推進上、問題となる点はないか(ある場合に回答、複数回答可)

- ア() 研究経費
- イ() 設 備
- ウ() 組 織
- エ() そ の 他

意見：
ヨーロッパにおける研究拠点の維持・運営がコスト・ベネフィットの観点からはたして妥当であるか疑問がある。またネットワークの編成が研究代表者のそれにあまりに依存している懸念がある。

3 これまでの研究成果について

当初の研究目的に照らして、現時点で期待された成果をあげているか(又はあげつつあるか)

- ア() 期待以上の成果をあげている
- イ() 概ね期待された成果をあげている
- ウ() 期待された成果をあげつつある
- エ() 期待された成果はあがっていない

意見：
研究体制の構築、シンポジウムの開催について特に期待された通りの成果を挙げている。

4 研究組織について

研究者相互に有機的に連携が保たれ、活発な研究活動が展開される研究組織となっているか

- ア () 有機的に連携が保たれている
- イ () あまり有機的に連携が保たれていない
- ウ () その他

意見：
国際的連携は相当の水準にある。ただし、当初計画にある研究協力者の中に関与のしかたがよくわからない人がある。

5 研究経費の使用状況について

研究経費は効率的・効果的に使用されているか

- ア () 効率的・効果的に使用されている
- イ () あまり効率的・効果的に使用されていない
- ウ () その他

意見：
全体としては資金は効率的・効果的に使われていると判断されるが、ドイツの拠点のコスト・ベネフィットには懸念がある。

6 研究課題の総合的な評価

該当欄	評価結果
A +	当初計画を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初計画どおり順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
B	当初計画より研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初計画より研究が遅れ、研究成果も見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

総合的な評価意見：

重要な研究であり、研究は計画通りに進展していると判断される。ただし、ドイツに拠点を置き、人を雇用することのコスト・ベネフィットについては懸念がある。日本の資金で日本にこの分野のノウハウを蓄積することの重要性を考えれば、日本の研究者、特に若手研究者がこの研究プロジェクトの中で育っていくような資金の使い方があるのではないか。